

種生物学会ニュースレター

The Society for the Study of Species Biology Newsletter No. 58



会長就任のご挨拶 1 / 第 57 回 種生物学シンポジウム（東京）のご案内 2
/ 第 56 回 種生物学シンポジウム（岡山）の記録 6 / 事務局からのお知らせ 9 / 会計報告 10

会長就任のご挨拶

工藤 洋

秋の気配が日毎に深まり、植物たちも日が短くなることに応答してあるものは落葉し、あるものは越冬葉を準備する頃となり、会員の皆様にはますますご健勝に過ごされていることと存じます。本年 2025 年 1 月から、新たに種生物学会会長に就任いたしました京都大学の工藤洋です。現在、布施静香さん（副会長）、本庄三恵さん（庶務幹事）、樋口裕美子さん（会計幹事）と 14 名の地区幹事、英文誌編集委員長の三宅崇さん、和文誌編集委員長の村中智明さん、学会賞選考委員長の川北篤さん、シンポ支援担当の柿嶋聡さん、男女共同参画担当の新田梢さん、中濱直之さん、渉外担当の藤井伸二さん、奥山雄大さん、監査委員の下野嘉子さん、荒木希和子さんの新体制で学会運営にあたっています。

また、前執行部としては、会長の西脇亜也さん、庶務幹事の水口亜樹さん、会計幹事の下野嘉子さんが会の運営にあたられました。任期中に水口さんが逝去され、執行部だけでなく当会が大きな悲しみに包まれたことは忘れることができません。前執行部に感謝と敬意の念を表しますとともに、水口さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。前執行部の意思を受け継ぎ、新役員の皆さんとともに、種生物学会の発展のために微力ながらもお役に立てるように努めてまいります。会員の皆様のご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

会長になって以来、「種生物学会のいいところって何だろうね」と時々尋ねるようになりました。「やっぱりシンポで学生と研究者の距離が近いことじゃないですか」と言ってくれた人がいます。確かに、私もはじめて種生物シンポジウムに参加したのは 4 回生の時でした。経験や職位に関わらず、自然の現象に魅了され、それを進化の観点で理解したいと研究している人がこんなにいる。自分もその一員になりたい。泊り込みの合宿形式で、データを持っていくと、色々と意見がもらえて。ちょっとしたアイデアなのに、大先輩から「天才やな」とか言われて。次も驚かせたいと、フィールドで何かないかと探そうになりました。今年のシンポでも、参加する学生が同じように感じてくれるといいなあと思います。

先日、本屋で「種生物本」を手に入れている人がいました。「そうそう、いい本なんですよ。そのままレジに行け、レジに行け、やったー」。一冊売れました。

「いい買い物ですよ、お客さん」。会員には配られて

いますから、会員以外の植物に興味がある方です。このシリーズ本、実は種生物学会の和文誌です。最近「種分化の生物学」がお手元に届いたと思いますが、そのカバーを外すと「種生物研究第 46 号」と書いてあります。種生物学会が財政難で、和文誌が廃止になりそうになった時に、アクロバットの単行本シリーズとして誕生しました。ピンチがチャンスになる典型だと思いました。この離れ業を成功させた、川窪さん、西脇さん、さすがです。文一の菊地さんありがとう。一冊として楽に出たものはありませんでしたが、歴代の編集長、責任編集者のご尽力で今日まで続いています。本の内容は、シンポジウムとも連動していて、少しずつ積みあがって、ずいぶんたくさんの本が出版されました。このシリーズが日本の野生植物研究に果たした役割は少なくありません。今年から、村中編集長のもと新体制がスタートしましたので、乞うご期待です。きっと新しい工夫で驚かせてくれることでしょう。

そして、世界に胸を張って誇ることができるのが、英文誌「Plant Species Biology」を発行していることです。1986 年の発刊以来、今年で 40 年目、vol. 40 が出ているところです。決して大きくない学会が 40 年にわたり、英文の国際学術誌を出し続けることはすごいことです。それができているのは、現編集長三宅さんに至るまでの歴代編集長、編集委員会メンバー、当会幹事で生態学会出版担当理事を務める久米さんの努力と、雑誌の発行を支え続けてきた会員の総意のおかげです。私の大学院時代の指導教官であった河野昭一先生は種生物学会の創始メンバーで、PSB の初代編集長でした。日本の野生植物研究の国際発信力を確かなものにするには、自ら国際誌を発行するしかない。強い意志がありました。「種子が発芽して、栄養成長をして、花を咲かせ、交配して、また種子ができる。それぞれの生活史形質が輪のように繋がって、種は続いていくんだ。わかるかヒロシ」。Plant Species Biology という雑誌の名前は、そのような思いに由来したのかなあと感じています。私たちの雑誌です。会員の皆様もこれはという原稿をぜひ PSB に投稿してください。待っています。

私たちは種生物学会のために何ができるでしょうか。新執行部で話してみると、「会員の分野がもっと広がると良くないですか?」、「国際化も考えたいで

すね」とか、結構チャレンジ精神があります。「よし、その 2 つで行きましょう」。さて、種生物学会はシンポ・単行本・PSB という三大事業をもちながら、会費 6,000 円 (学生 3000 円) という驚きの学会です。新たなことを始めるための資源は、会員の皆さんということになります。こんなことをやってもいいとか、新しいアイデアがあるとか、シンポの開催地になってみたいとかがありましたら、執行部まで (office@speciesbiology.org) ご連絡ください。

「会員の分野を広げたい」種生物学会は、会員の構成が面白くて、系統分類学・生態学だけでなく、草地学、雑草学、育種学、林学、病理学、理論生物学、集団遺伝学、生理学、分子生物学など、多様なバックグラウンドを持つ会員がいます。その広がりを持続し続けるにはどうすれば良いのでしょうか。種生物学会ではシンポがその大きな役割を果たしてきました。泊まり込みの懇親会部屋では、今日のシンポの内容が熱く語られます。風呂に入ってヤレヤレと思いながら現れた非会員の講演者は、自分の発見が議論の中心になっていることに驚き、ここはどのような、あそこはどのようなと興味津々のディスカッションの渦に巻き込まれます。学会本来の原始の姿に一種の感動を覚え、入会し、場合によっては、数年

後にはシンポを開催しています。一方で、学会は初めてという学生が、その熱心な様子に心打たれています (多分)。会員の皆さん、今年のシンポでもぜひ研究の話で熱く盛り上がっていただき、種生物特有の「興味津々トラップ」を発動させましょう。

「国際化も考えたい」こちらについては、現在、望月さんを中心にシンポ実行委員会が取り組んでくれています。12 月 19 日～21 日に八王子で開催されるシンポジウムでは、プログラムの一つとして、「擬態花」についての国際シンポジウムが開かれます。全く新しい試みで、従来の学生が積極的に発表する雰囲気を持続しながら、国際化も図るという難問にチャレンジしてくれています。国際シンポの内容は PSB に掲載予定でもあります。このチャレンジの成否は、シンポに来てくださる学生会員の皆さんにかかっています。ぜひ、日本語・英語両方でのディスカッションをするために、八王子に集合してください。申し込みは始まっていますので、早めの登録をお願いいたします。

最後となりますが、会長として、より良い学会となるように執行部メンバーと共にこれからも努力してまいります。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

第 57 回種生物学シンポジウムのご案内 (オンライン・東京)

<https://sites.google.com/view/sssb57/>

第 57 回となる本年度の種生物学シンポジウムは、ほぼ全面オンライン形式で行います。合宿形式で 12 月 19 日 (金)～21 日 (日) に開催いたします。開催地は、東京都八王子市にある大学セミナーハウス (<https://iush.jp/>) です。20 日の国際シンポジウムのみ、オンライン配信を予定しています。

学会員の方は、シンポジウムウェブサイト (<https://sites.google.com/view/sssb57/>) に記載の案内に従って申し込みをしていただければ、どなたでもご参加およびポスター発表を行っていただけます。種生物学会恒例の合宿形式ならではのアットホームな雰囲気の中、夜遅くまで白熱する議論をぜひお楽しみください。

今回のシンポジウムは、例年とはやや異なる構成で開催いたします。研究発表としては、片岡奨励賞講演、ポスター発表、国際シンポジウム、和文誌シンポジウムを予定しています。

国際シンポジウムでは、擬態花の研究に取り組む研究者を国内外から招き、アジアの植物が秘める、世界にインパクトを与える興味深い生態と進化につ

申込締切は 11 月 7 日 (金) です

※ ポスター発表要旨登録締切は 11 月 14 日 (金)

※ 当日参加は日帰りのみ受け付けます。

いて知見を交換する場といたします。

また、和文誌シンポジウムでは「土壌微生物」をテーマに企画を行い、普段の種生物学会ではターゲットになることの少ない土中の現象に目を向ける良い機会となることと思います。

例年に増して幅広いジャンルの研究発表が揃いますので、ぜひ身近でご関心を持ちそうな方にもお声がけいただき、にぎやかな大会にしていきたいと思います。

みなさまのとおきの研究を持ち寄り、種生物学会らしい白熱した議論に花を咲かせていただければ幸いです。新しいご発表や昨年からの進展を伺えるのを、実行委員一同とても楽しみにしております。どうぞ奮ってご参加ください。

● 開催方法 : オンライン

ただし、国際シンポジウムは ZOOM でのオンライン配信を予定しています。

登録は参加登録とは別途、シンポジウムウェブサイトおよびメーリングリストにてご案内します。

● 全体のスケジュール

12月19日（金）

13:00-18:00 各種委員会・幹事会
16:00-18:00 受付開始・ポスター貼付
18:00-19:00 開会の挨拶・夕食
19:00-20:00 片岡奨励賞講演
20:00- 交流会（ポスター会場にて）

12月20日（土）

07:30-08:30 朝食
08:30-10:00 ポスター発表（奇数コアタイム）
10:00-11:30 ポスター発表（偶数コアタイム）
12:00-13:00 昼食
13:00-17:00 国際シンポジウム
17:15-18:45 総会
19:00-21:00 懇親会
21:00- 交流会（ポスター会場にて）

12月21日（日）

07:30-08:30 朝食
08:45-09:00 集合写真撮影
09:00-12:00 和文誌シンポジウム 午前の部
12:00-13:00 昼食
13:00-15:30 和文誌シンポジウム 午後の部
15:30 閉会

● 国際シンポジウム

『アジアの擬態花研究の最前線』

12月20日（土） 企画者：望月昂（東京大学）

被子植物は送粉者との関わりの中で、多様な花形質を進化させてきました。なかでも、蜜のある花や腐敗した果実・肉片、あるいは特定の昆虫の雌に擬態して送粉者を誘う「擬態花」は、自然界にみられる極めて興味深い現象です。擬態花は、種間相互作用におけるコミュニケーション、繁殖形質の革新や感覚器官における適応を理解する上で格好のモデルとされてきましたが、その分類学的多様性や模倣対象の幅、送粉者誘引の仕組み、遺伝的基盤など、多くの謎が残されています。

本シンポジウムでは、香港・タイから2名、国内から3名の研究者を招き、擬態花研究の最前線を紹介します。バンレイシ科、ウマノスズクサ科、ラン科、キョウチクトウ科など様々なグループの被子植物における、真新しい擬態花の例や、誘引に関わる化学物質、その遺伝的基盤に関する最新の研究成果をお話いただきます。アジアの植物が秘める、常識を覆す新奇な戦略を通じて、花と送粉者の進化的駆け引きの際たる例である擬態花研究の新たな潮流を紡ぎます。

講演者・タイトル

Ming-Fai Liu (Kadoorie Farm and Botanic Garden, Hong Kong)

"Flower mimics leaf litter trapped on trees to dupe a beetle pollinator using the cineole synthase MhCINS"

Aroonrat Meekijjaroenroj Kidyoo (Chulalongkorn University, Thailand)

"When an asclepiad flower disguises itself as a fig: pollination by brood-site mimicry in *Heterostemma ficoides* (Apocynaceae)"

Ko Mochizuki (The University of Tokyo)

"Dying-ant mimicry in *Vincetoxicum nakaianum*: a new evolutionary consequence of adaptation to fly pollination"

Yuta Sunakawa (The University of Tokyo)

"Gall midge pollination in *Oberonia*: a possible mimicry case?"

Yudai Okuyama (National Museum of Nature and Science)

"Elucidating the genetic basis of evolutionary novelty associated with floral mimicry"

※詳細なタイムテーブルは検討中です。

●和文誌編集委員会企画シンポジウム

「生態系の土台：植物と微生物が織りなす世界」

12 月 21 日 (日) 企画者：中野亮平 (北海道大学)、松岡俊将 (京都大学)

多くの植物の生存を支える土壌そして地上部の植物周囲には、多種多様な微生物が存在しています。特に根の周囲には根圏マイクロバイオータが形成され、これらの微生物群は植物の養分獲得・成長、免疫応答、ストレス耐性など、さまざまな生理現象に大きな影響を及ぼしています。植物はこのマイクロバイオータのバランスを巧みに維持し、そして時にコントロールすることで、自身の生存に有利な環境を整えています。そのため、個々の植物の生き様に加えて、多種との競争、分布、多様性などあらゆるスケールで「植物生態系の姿」を捉えるためには、この植物と微生物の関係を考慮する必要があります。一方、微生物にとっても植物は不可欠な存在であり、植物の分泌する物質や有機物の分解を通じて、生態系における物質循環にも大きく貢献しています。

本シンポジウムでは、こうした植物生態系の基盤を支える土壌微生物の働きを、分子レベルから生態系スケールまで幅広い視点で研究する研究者を招き、最新の成果を紹介いただきます。また特別講演として、本研究分野において長年にわたり基礎から応用まで、実験室から野外に至る多様なアプローチで先導的な研究を続けてこられた南澤先生をお招きしました。講演後には、会場の聴衆にも参加していただき、植物と微生物の関係についてパネルディスカッション形式の議論を行います。講演と議論を通じて、植物と微生物が織りなす複雑な相互作用を、個別要素ではなく「総体としての振る舞い」として捉え、多面的な視点から種生物学の可能性、これから進むべき未来を考える場としたいと思います。

講演者・タイトル

杉山 賢子 (京都大学 フィールド科学教育研究センター)

「外生菌根菌の種生物学？ 群集データから見る菌根菌と植物の相互作用」

橋本 陽 (国立研究開発法人 理化学研究所 バイオリソース研究センター)

「系統分類と種生態の狭間から眺める植物-菌類相互作用」

執行 宣彦 (国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所)

「ローカル・マイクロバイオームの役割解明と森林生態系理解への貢献」

中村 直人 (京都大学生存圏研究所)

「根圏ケミカルコミュニケーションから迫る植物-微生物間相互作用」

市橋 泰範 (国立研究開発法人 理化学研究所 環境資源科学研究センター)

「種を超えて紡がれる土壌・植物・微生物のシステム生物学」

西田 帆那 (国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構)

「根粒共生研究してたら温暖化対策に取り組んでいた件」

特別講演：

南澤 究 (東北大学)

「植物と土壌生物による窒素循環の学際研究：メタン酸化窒素固定と根粒窒素代謝攻防」

※詳細なタイムテーブルは検討中です。

●参加・ポスター発表申し込み【11 月 7 日 (金) まで】

シンポジウムウェブサイト (<https://sites.google.com/view/sssb57/>) をご参照のうえ、参加申し込みフォーム (<https://forms.gle/j2AjiJCgzh329eMp6>) からお申し込みください。

- 参加費は、一般 10,000 円、学生 5,000 円（非会員の方はそれぞれ 1,000 円 up）です。国際シンポジウムのみの参加は無料です（別途申し込み）。懇親会費 4,000 円（一般）、2000 円（学生）、宿泊費 13,310 円、食事代 5,300 円（19 日夜および 20・21 日朝・昼食の合計 5 食分）がかかります。
- 2 泊 3 日フル参加では一般会員 32,610 円、学生会員 25,610 円になります。**
- 会場の大学セミナーハウスへは、なるべく公共交通機関をご利用ください。自家用車は 40 台分ほど駐車可能で、予約はできません。
- 託児を利用される方は、参加申し込みフォームにてお申し込みください。
- 今回のシンポジウムは、非会員でも聴講いただけますが、ポスター発表は種生物学会員に限って受け付けます。
- ポスター発表を希望する方は、参加申し込みフォームで「ポスター発表を申し込む」にチェックをしてください。ポスター発表の申込者（発表者）は、2025 年度分の種生物学会会費を納入済の会員に限ります。
- 非会員の方でポスター発表を希望の方は、事前に種生物学会への入会をお済ませください。入会手続きは、種生物学会ホームページから行うことができます。ホームページの入会案内にしたがって、今年度分の会費を 11 月 7 日（金）までにお振り込みください。会費の振り込みが確認できない場合は、発表申込みをキャンセルさせていただく可能性があります。
- ポスター発表が優れていた発表者には、「種生物学会ポスター賞」および「河野昭一ポスター賞」を授与しています。「河野昭一ポスター賞」は、発表者を学部学生および修士課程の大学院生に限定したポスター賞です。
- シンポジウムへのオンサイトでの参加は、申込締切以降は出来ませんが、オンラインでの聴講に限り締切後の登録も可能とする予定です。ただし、できるだけ締切までに参加登録をしていただけますようお願いいたします。

● ポスター発表要旨の登録【11 月 14 日（金）まで】

- 発表要旨は、ポスター要旨テンプレート（https://drive.google.com/uc?export=download&id=1ty5vdcJ2LagZsYu8c0oizY_hu-NDbc7i:docx ファイルのダウンロードが開始されます）に記入の上、要旨登録フォーム（<https://forms.gle/S3rDNax84qS1Tc2JA>）からご登録ください。
- タイトルは全角 40 文字以内、日本語 600 字、英語 250 字、画像一点を挿入してください。要旨は最大 2 ページでご準備ください。
- 要旨の具体例は、シンポジウムウェブサイト（<https://sites.google.com/view/sssb57/>）の「発表を希望される方へ」をご参照ください。

● ポスター発表について

- 現地でのポスター掲示により発表を行います。ポスターボードは A0 の縦型です。
- 12/20（土）午前中にポスターコアタイムを行います。受付直後から掲示が可能です。
- 12/19（金）夜にポスター会場で交流会を行います。種生物学会ならではの、アットホームな研究交流の場となることを期待しています。

● 発表言語について

- 本シンポジウムには海外からの参加者も来場します。ポスター発表では、発表者・来場者が互いに学び合えるよう、言語の壁を越える工夫を歓迎します。**英語が流暢である必要はありません。**相手の研究者に伝える工夫が重要です。研究交流をより開かれた場にしていきましょう。
- ポスターを準備する上で、次のいずれか一つでも取り入れていただけるようご検討ください。
 - タイトル、要点、図表を日英併記または英語で作成 ←推奨
 - ポスターの全面英語化
 - 日本語で作成する場合、英語翻訳した A4 別刷りの準備
 - 研究室での英語質疑の練習

● 要旨集について

- 要旨集は PDF で発行します。参加者には、電子媒体の要旨集がダウンロードできる URL をご連絡します。

● 第 57 回種生物学シンポジウム実行委員会 (五十音順)

武田和也 (山梨県富士山科学研究所)、立木佑弥 (東京都立大学)、望月昂 (東京大学)

問い合わせ先: sssb2025tokyo at gmail.com (at を@に置き換えて下さい)

第 56 回 種生物学シンポジウム (岡山) の記録
2024 年 12 月 1 日 (日) ポスターセッション・オンライン
12 月 6 日 (金) ~8 日 (日) オンサイト・オンライン開催

基調講演「岡山県の植物」

鐵 慎太郎 (倉敷市立自然史博物館) 岡山県の植生
と倉敷市立自然史博物館の標本庫について
狩山 俊悟 (倉敷市立自然史博物館友の会) 岡山県
の植物相と岡山県版レッドデータブックの改訂

片岡奨励賞受賞講演会

田川 一希 (鳴門教育大・学校教育) 食虫植物モウ
センゴケ属をめぐる種間相互作用の自然史

実行委員会シンポジウム「農学分野の最新技術を種
生物学に活かせるか？」

企画者: 勝原光希 (岡山大学)・松本哲也 (茨城大
学)・宮崎祐子 (岡山大学)
宮崎祐子 (岡山大学) 趣旨説明
西村和紗 (岡山大学) 植物育種学研究における MIG-
seq 法の利用と最適化
元木航 (岡山大学) 他者を咲かせる植物をつくる—
接ぎ木による開花誘導技術の育種・採種への利用—
安場健一郎 (岡山大学) イチゴのポリネーター活動評
価システム及びその利用方法の開発
総合討論

ミニシンポジウム「搾取する植物」

座長: 村中智明 (名古屋大学)
福島健児 (国立遺伝学研究所) 動物から搾取する植
物、その進化を探る
末次健司 (神戸大学) 光合成をやめた植物「従属栄
養植物」の不思議な生活
総合討論

プレ和文誌編集委員会企画シンポジウム「生態系の
土台: 土壌微生物の世界」

座長: 工藤洋 (京都大学)
松岡俊将 (京都大学) マクロな視点から菌類の多様
性と機能を考える
中野亮平 (北海道大学) ミクロな視点から《植物+
微生物》の生き様を考える
総合討論

ポスター発表

菅原早紀 (鹿大院・連農、琉大熱生研・西表)、梶田

忠 (鹿大院・連農、琉大熱生研・西表)、川窪伸光
(岐阜大・応用生物) 西表島に生息するヤエヤマ
セマルハコガメによる種子散布 ***ポスター賞**
Anna K. Valchanova (東大・院・理)、柿嶋聡 (昭
和大・富士山麓自然・生物)、関本奏子 (横市・理)、
奥山雄大 (科博・植物) カンアオイ属の花の香り
は送粉者の活動に応じて日周変化するか?
森信之介 (慶應義塾大・生物学教室)、Darren CJ
Wong (Research School of Biology・Australian
National University)、長谷川陽一 (森林総研)、
森口喜成 (新潟大・農) ユキツバキとヤブツバキ:
虫媒から鳥媒へのポリネーターシフトと花卉の色
差 ***ポスター賞**
高木健太郎 (筑波大・生物)、大橋一晴 (筑波大・生
命環境) 混ざるほど個性は輝く: 他種との空間的
な混在度が花色を差別化する利益におよぼす影響
吉田直史、工藤洋、本庄三恵 (京大・生態研) ウイ
ルス長期感染による宿主植物の環境応答性の変化
清水華子 (京大・生態研)、西尾治幾 (滋賀大・DS
センター)、工藤洋 (京大・生態研) アブラナ科の
越冬葉における CMM1 の発現変動
孫櫻 (神戸大・院・農)、笠澄望 (神戸大・院・農)、
岡田萌子 (新潟大・院・自然科学)、吉田健太郎 (京
大・院・農)、松岡由浩 (神戸大・院・農) 地中海
東部地域に自生するコムギ近縁野生種 *Aegilops*
umbellulata Zhuk. の系統地理学的構造はどのよ
うに形成されたのか?
大坪雅、工藤洋、本庄三恵 (京大・生態研) カブモ
ザイクウイルス感染が多年生草本ハクサンハタザ
オの生存と繁殖様式に及ぼす影響
秋元洋希 (早稲田大・院・先進理工)、細将貴 (早稲
田大・教育・総合科学学術院) ヘビの「呪い」: 襲
われたヘビが出す臭気性分泌物は捕食者の天敵を
誘引する
平野日向 (農工大・院・連合農)、Hari Prasad
Devkota (熊本大・院・生命科学)、坂本小雪 (信
州大・院・総合理工)、水野貴行 (科博・植物)、小
林元 (信大・AFC)、村井良徳 (科博・植物/農工大・
院・連合農) 高所栽培はイワベンケイ *Rhodiola*
rosea の紫外線防御物質の増加に寄与する
島田真彦、北村俊平 (石川県立大) トラムルハナバ
チ女王の訪問花序選択に影響するパッチと花序の
開花数と局所的花序密度

片岡利文(都立大・牧野)、米岡克啓(都立大・牧野)、高橋弥生(お茶大・院・ライフサイエンス)、高添清登(京大院・人環)、斉藤俊浩(屋久島照葉樹林ネットワーク)、松尾歩(株式会社 GENODAS)、村上哲明(都立大・牧野) 超希少種ヤクシマウスユキソウの生育域外保全

小茂尻真凜、吉田直史、工藤洋、本庄三恵(京大・生態研) ウイルス感染が多年生宿主ハクサンハタザオの花形質と繁殖成功に与える影響

山口万里花(東大・院・理)、高橋秀男(東久留米市)、菊地波輝(豊博)、吉田貴大、村上哲明(都立大・牧野)、奥山雄大(科博・植物園) ネコノメソウ属イワボタン列と絶対送粉共生系を築くクチナガハバチ属の遺伝的多様性

小西陽巳(筑波大・院・生物)、大橋一晴(筑波大・生命環境系) 折り紙で探る花の謎：チョウ媒花の向きと形の組合せがアゲハの盗蜜頻度におよぼす影響 ***ポスター賞**

小西桃花、草竹恵美(岡大・院・環境生命)、豊田敦(遺伝研・ゲノム)、伊藤武彦(東科大・生命理工)、三村真紀子(岡大・院・環境生命) イカリソウ属の種多様性とニッチ分化

三宅慶典(都立大・理・生命)、深野裕也(千葉大・園芸)、田村浩一郎(都立大・理・生命)、立木佑弥(都立大・理・生命) 都市化がもたらす環境の傾斜と表現型の地理的勾配

奥井七央子(東大・理)、奥山雄大(科博・植物園) チャルメルソウ属-キノコバエ類共生系における特異性関連形質の探索

南駿、佐々木頭、大槻久(総研大・統合進化) 植物病原性真菌とキクイムシの条件的共生関係の進化

西垣維音、倉本宣(明大・農) 市街地の中の団地や公園におけるハナバチの種組成と花の利用状況

松下雄一、中田和義、勝原光希(岡大・院・環境) 外来種カロライナツユクサと近縁在来種ツユクサにおける繁殖干渉

田附優実、井田崇(奈良女子大・院・生物) 熱波はマルハナバチの学習を含む採餌行動を変化させるか？

白井利空(岡大・工)、中田和義(岡大・院・環境)、勝原光希(岡大・院・環境) フェンスへの巻き付きはつる植物コヒルガオの成長量を増加させるか？

鈴木郁恵(筑波大・生物)、大橋一晴(筑波大・生命環境系) 類はハチをよぶ？：マルハナバチの花選びにおける過去におぼえた色へのこだわり

進藤翔大、大友悠雅、新田梢(麻布大・環境) 神奈川県境川流域におけるヤマエンゴサクの自家不和合性の検討

篠原智哉、中津颯希、長島凱斗、新田梢(麻布大・環境) ニワゼキショウ属不明種の開花時間と形態の特徴

寺本結香(岡山大・理・生物)、菅井徹人(森林総研・北海道)、石塚航(道総研)、三村真紀子(岡山大・理・生物) 常緑針葉樹トドマツの当年生実生にお

ける高温ストレス耐性評価

西村悠里(新潟大・環境科学)、石崎智美(新潟大・理) 海岸林構成樹種がセイタカアワダチソウ VOCs から受ける影響に関する研究

佐々木陽依(京大・生態研)、河合清定(国際農研)、石田厚(京大・生態研)、才木真太郎(森林総研)、山尾僚(京大・生態研) 主要脈の密度が広葉樹の薄い葉の進化に及ぼす影響

楠実友(東京農大・院・農)、船本大智(東京農大・農)、三井裕樹(東京農大・農) 口吻の長いスズメガはカラスウリの主要な送粉者か？

砂川勇太、望月昂、川北篤(東大・院・理) ラン科ヨウラクラン属の送粉生態の解明に向けて

村山柊(新潟大・院・自然)、櫻井裕介(新潟大・院・自然)、西川孝一(新潟大・農)、塩尻かおり(龍谷大・農)、高林純示(京都大・生態研センター)、石崎智美(新潟大・理) 植物間コミュニケーションの代償：ストレス環境下での抵抗性と成長のトレードオフ

塚本佳生、高山浩司(京大・院・理) 小笠原諸島固有植物オガサワラグミの系統的位置と窒素固定共生細菌の変化 ***河野昭一ポスター賞**

河内凜太郎、村山柊、石崎智美(新潟大)、舟久保栄彦、石田真也(ふなぐぼ農園)、伊藤誠、久保田美里(株式会社いにしえ)、塩尻かおり(龍谷大) イネと雑草の草刈りの匂いを介した植物間コミュニケーション

大塚なつみ(新潟大・農)、石崎智美(新潟大・理)、渡邊幹男(愛知教育大・生物)、砂押あゆみ(愛知教育大・生物)、神戸敏成(龍谷大・農)、大原隆明(富山中央植物園)、田川一希(鳴門教育・生物)、大原雅(北海道環境財団) 広義ハルリンドウの生活史特性

竹内希海(筑波大・院・生物)、大橋一晴(筑波大・生命環境) せっかち派 vs. 慎重派：マルハナバチの採餌戦術は連合学習の成立によって変化するか？

高柳楓、早瀬元晴、太田岬(愛教大・生物)、芹沢俊介(愛知みどりの会)、常木静河(愛教大・生物) カワヂシャ群落に訪れるホソヒメヒラタアブ属の行動

田村豊、石井博(富山大・理) 花で狩りをするクモの花選択：成長ステージによる差異と盗蜜者捕食の可能性

上野泰生(富大・院・理工)、平山楽(神大・院・人間)、丑丸敦史(神大・人間)、石井博(富大・理工) 成立年代が異なる草原間の、花形質組成および各植物種を利用する送粉者組成の比較

田嶋晶、石井博(富山大・院・理工) 花の模様に使われる色は、花の形態や模様のタイプによって異なるのか？

秋山巨樹(学芸大・環境)、星野佑介(東北大・植物園)、早田鴻允、堂園いくみ(学芸大・環境) シラヒゲソウの花の特性と繁殖様式

早田鴻允(学芸大・環境)、星野佑介(東北大・植物

園)、秋山巨樹、堂園いくみ(学芸大・環境) ウメバチソウ属植物に訪花する双翅目昆虫の行動と気温・照度との関係

永光輝義(森林総研) オオヤマザクラ南限とカスミザクラ北限の交雑帯では遺伝的混合と表現型浸透が異なる

大崎晴菜(都立大・理)、山尾僚(京大・生態研) 集まるスペシャリストと避けるジェネラリストのニッチ分割

小野知洋(名古屋市)、野村康之(龍谷大学・食農研) イシモチソウの生活史と塊茎形成

武田和也(富士山研) ESP32 を用いた安価なタイムラプスカメラの開発—1 台 5000 円を目指して

張珏嬌(名大・地球環境)、金岡雅浩(県立広島大・生物資源)、西田佐知子(名大・博) ホウセンカ・アフリカインパチェンス間の繁殖干渉

工藤洋、坂根雅人(京大・生態研)、Karol Marhold(スロバキア科学アカデミー)、清水(稲継)理恵、清水健太郎(チューリヒ大・進化生物環境研)、深城英弘(神戸大・院・理学) タネツケバナ属植物 *Cardamine amara* における離生通気組織形成

指村奈穂子(日本自然環境専門学校)、大関佑弥(生き物研究・広報団体 Bio connect)、鈴木正樹(日本自然環境専門学校) 新潟県におけるミヤマウメモドキ (*Ilex nipponica*) の分布と生育地の環境
高野(竹中) 宏平、浜田崇、栗林正俊、葉田野希、尾関雅章、堀田昌伸、畑中健一郎(長野県環境保研) 長野県環境保全研究所自然ふれあい講座「セミのぬけがらを探せ！」の取り組み

Ko Mochizuki (Univ. Tokyo), Tigran Ghrejjan, Nonna Grigoryan, Gayane Karagyan, Mark Yu. Kalashian (Armenian National Academy of Sciences) Plant-pollinator landscape in Armenia: preliminary observation and hypothesis

張皓天(名大・地球環境)、西田佐知子(名大・博) 植物における系統的距離と繁殖干渉強度の相関の検証

甘田岳(森林総研)、野口享太郎(森林総研)、中下留美子(森林総研)、岩花剛(アラスカ大)、小林秀樹(JAMSTEC) 永久凍土環境に対する葉形質と細根形質の応答: 広域優占低木種群イソツツジ亜節に着目して

中濱直之(兵庫県立大・ひとはく)、小長谷達郎(奈良教育大)、上田昇平(大阪公大)、平井規央(大阪公大)、矢後勝也(東京大)、矢井田友暉(神戸大)、丑丸敦史(神戸大)、井鷲裕司(京都大) 国内希少野生動植物種オガサワラシジミが繁殖途絶に

至った集団遺伝学的背景

村中智明(名大・農) アオウキクサ・コンプレックスへの挑戦: 問題点の整理

永濱藍(科博・植物研究部)、植村仁美(科博・植物園)、二階堂太郎(科博・植物園) 筑波実験植物園で 20 年間蓄積された記録から見る、日本在来植物における開花日の変動

吉田理一郎、田口翔麻、脇田千尋、芹川慎一郎、宮路裕之(鹿児島大・農) バジルとの混植は揮発性シグナルを介してトマトの傷害応答を促進する

長谷川佳代(名工大・院・工) つる植物における自己認識能力のスクリーニング結果

都築洋一(東大・農) 種子段階を考慮した多年生植物のフル生活史の推定と個体群動態予測

柿嶋聡(昭和大・富士山研)、大野順一(静岡県)、阿部篤志(沖縄美ら島財団)、奥山雄大(科博・植物園) アマミテンナンショウ 3 亜種の遺伝的な分化に基づく分類と保全

本庄三恵、吉田直史、工藤洋(京大・生態研セ) ウイルス感染によるハクサンハタザオのアントシアニン蓄積低下とストレス耐性への影響

大西亘(神奈川県博) 博物館の標本を利用してみよう! 2024 年版植物標本編

久米篤、Amila Nuwan Siriwardana(九大・農) 植物は季節を色で感じるか?—日射スペクトルの季節変動—

渡部俊太郎(鹿児島大・理) 九州南部におけるナツツバキ属 3 種の水平・垂直分布パターン

Chongmeng Xu (Univ. of Zurich), Yasuhiro Sato (Hokkaido Univ.), Misako Yamazaki (Univ. of Zurich), Marcel Brassler (Univ. of Zurich), Matthew A. Barbour (Univ. of Sherbrooke), Jordi Bascompte (Univ. of Zurich), Kentaro K. Shimizu (Univ. of Zurich) シロイヌナズナの成長と開花に関わる遺伝子座の発見: アブラムシ密度の GWAS から

ポスター賞受賞者

<種生物学会ポスター賞>

菅原早紀(鹿大院・連農、琉大熱生研・西表)

森信之介(慶應義塾大・生物学教室)

小西陽巳(筑波大・院・生物)

<河野昭一ポスター賞 ※>

塚本佳生(京大・院・理)

※ 筆頭発表者を学部学生と大学院生(修士)に限定した奨励的ポスター賞です。

会計報告

2024年度種生物学シンポジウム（岡山）

収入の部

参加費（オンサイト）	3,764,800
参加費（オンライン）	122,500
種生物学会よりシンポジウム補助金	300,000
総社市全国大会等開催補助金	100,000
小計	4,287,300
前年度繰越金	582,795
合計	4,870,095

支出の部

会場費（施設利用料）	323,150
会場費（宿泊、食事代）	3,286,150
会場費（ポスターボード）	175,165
休憩所設営、交流会、二次会費	77,316
アルバイト費	95,000
オンライン環境整備費	107,304
事務費	16,189
託児費	93,876
招待講演者の参加費等	141,000
小計	4,315,150
次期繰越金	554,945
合計	4,870,095

2024年度種生物学シンポジウム実行委員会の会計に関し、会計帳簿、証拠書類（領収書、参加費受付記録等）および通帳を監査照合した結果、収支とも適正に執行され、帳簿に適正に表示されていることを認めます。

2025.5.21

2024年度会計幹事 下野嘉子



事務局からのお知らせ

電子メールアドレス更新のお願い——

種生物学会では、さまざまな情報を電子メールで配信しています。メッセージが届かない方は、電子メールアドレスが登録・更新されておきませんので、事務局までご連絡ください。（庶務幹事 本庄三恵）

事務局の連絡先は office@speciesbiology.org です

会計報告

種生物学会 2024年度 決算

期間: 2024年1月1日～12月31日

収入の部	2024年予算額	2024年決算額
国内会員会費	1,600,000	2,046,000
著作権料	100,000	124,671
その他(利息など)	10,000	907
小 計	1,710,000	2,171,578
前年度繰越金	9,879,767	9,879,767
合 計	11,589,767	12,051,345

支出の部	2024年予算額	2024年決算額
出版費	2,000,000	1,984,840
和文誌44号 和文誌45号	2,000,000	1,984,840
事務費	450,000	425,267
発送費	150,000	197,027
冊子発送作業費	50,000	16,000
和文誌編集業務	200,000	200,000
その他	50,000	12,240
ウェブサイト維持管理費	126,000	129,140
シンポジウム補助金	300,000	300,000
片岡奨励賞副賞	100,000	50,000
PSB論文賞副賞・郵送料	30,000	4,520
交通費	70,000	0
学会選挙費用	50,000	67,118
自然史学会連合分担金	0	0
日本分類学会連合分担金	10,000	20,000
男女共同参画連絡会分担金	10,000	10,000
予備費	20,000	0
小 計	3,166,000	2,990,885
次期繰越金	8,423,767	9,060,460
合 計	11,589,767	12,051,345

会員数 (2025年10月1日現在)

個人会員	328
一般会員	272
学生会員	56

種生物学会 2025年度 予算 期間: 2025年1月1日～12月31日

収入の部	2025年予算額
国内会員会費	1,600,000
著作権料	100,000
その他	10,000
小 計	1,710,000
前年度繰越金	9,060,460
合 計	10,770,460

支出の部	2025年予算額
出版費	1,000,000
和文誌46号	1,000,000
事務費	260,000
発送費	80,000
冊子発送作業費	30,000
和文誌編集業務	100,000
その他	50,000
ウェブサイト維持管理費	129,000
シンポジウム補助金	300,000
片岡奨励賞副賞	100,000
PSB論文賞副賞・郵送料	30,000
交通費	70,000
学会選挙費用	0
自然史学会連合分担金	20,000
日本分類学会連合分担金	0
男女共同参画連絡会分担金	10,000
予備費	20,000
小 計	1,939,000
次期繰越金	8,831,460
合 計	10,770,460

(会計幹事 樋口裕美子)

種生物学会ニュースレター 第 58 号

発 行 種生物学会
<http://www.speciesbiology.org/>

編 集 本庄 三恵 (庶務幹事)
 〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
 京都大学 生態学研究センター
 種生物学会事務局

発行日 2025 年 10 月 15 日